

# 音の贈り物

The gift of sound

M A R I K O S E N J U



写真提供:東芝EMI

# 音楽が与えてくれる喜びを すべての人と分かち合いたい

バイオリニスト  
**千住真理子**さん

限に広がっていく。楽器というよりも体温を持つ生き物のようでした。このバイオリンには、自分のすべてを捧げてはまだ足りないのではないかと、恐ろしいほどの魅力を感じました。

ストラディバリウスの「デュランティ」で演奏するようになって、もう一度ゼロから音楽と向き合うことになりました。音の出し方から音楽への姿勢、ステージに立ったときの心構えまで、すべてが変わりました。音楽は、言葉以上に正直なもの。バイオリンの音色は、演奏する人の心そのものなんです。百の言葉を並べるよりも多くのことを、たった一音であらわすことができる。バイオリンほど私の心を雄弁に語ってくれるものはありません。

## バイオリンを続けていきたい 転機となったホスピスの演奏

20歳の頃でもうしても超えられない壁に突き当たり、しばらくバイオリンを離れていた時期がありました。そんなときあるホスピスから、私の演奏を聴きたいという患者さんがいるから来てくれないかと連絡が入りました。全く練習をしていなかった私の演奏は散々でした。それでもその方は私の手をにぎり、涙を浮かべながら「ありがとう」と言うてくださったのです。一分一秒をかみしめながら生きていたその方を前に、なんてひどい演奏をしてしまったのだろう。いつかまたこのようにすることがあったら、そのときには精いっぱい演奏をした

い。そう思うとプロとしての活動を再開しながら、ホスピスでの演奏を始めるようになりました。

音楽は全身で感じるもの  
生きる喜びを与えてくれる

ホスピスでは、難しい曲を何のミスもせずに弾くことが要求されているわけはありません。そこにいる方々は私のバイオリンから体温を感じたいんです。一緒に笑い、一緒に泣くことのできる音楽が求められるんです。

中には耳の不自由な方もいます。またく聞こえない方もいます。でもそのような方でさえ、風船を私の体につけて全身で感じようとなさる。振動によって音楽を楽しもうとするんですね。

耳が聞こえないという決断は音楽を演奏しめないうことではないんです。耳が聞こえにくいというところで、音楽を聴く喜びをあきらめないでほしいと思います。音楽はむしろ聴覚が弱くなったり、聴力を失った人に、何か伝えるものがあるのかもしれません。

鳥の声や川のせせらぎに心を癒やされたり、音楽を聴いて感動したり。音は私たちにさまざまな恩恵を与えてくれます。バイオリンの名器といわれるストラディバリウスの中でも、特に由緒ある「デュランティ」と運命的な出会いを果たしたバイオリニストの千住真理子さん。音はそれ自体が音楽になる。多くの人に親しんでほしい、といいます。

## 言葉よりも多くを語る音楽 楽器の音色は心そのもの

音がうごめく、という感覚を経験したのは2年ほど前、ストラディバリウスの「デュランティ」を初めて手にしたときのことでした。あるとき、スイスの知人から電話がかかってきたんです。「すごい音のストラディバリウスがあるから見てみないか」と。見せていただけるならと軽い気持ちでいたら、楽器ケースを開けた

瞬間に圧倒されてしまいました。他のバイオリンからは感じたことのないような強いエネルギーが押し寄せてきて、「音弾いただけで体中に電流が走ったかのような衝撃を受けたんです。

音は生命感にあふれ、やわらかく、ぬくもりがある。かと思つと粘り気がある、音が動くというよりも「うごめいているんです」。二つの音だけを弾いているのにいくつもの違う音が同時に響き、その音が共鳴し合うて無



PROFILE せんじゅまりこ / 12歳のときNHK交響楽団との共演でデビューし、1979年には第26回パガニーニ国際コンクールに最年少で入賞。慶応義塾大学を卒業後は指揮者の故ジュゼッペ・シノーポリに認められ海外デビューを果たす。社会活動にも精力的で、音楽による国際親善に努めてきたほか、ホスピスでのボランティア演奏にも力を入れている。キャスター、司会などテレビやラジオへの出演も多い。主な著書に『聞いて、ヴァイオリンの詩』(時事通信社)がある。